

公開講演会 「個をつなぐ住まい— “住む”側の実験と“建てる”側の実験」

開催日：2004年10月29日 於：京都私学会館

講演：篠原 聡子¹⁾

コメンテーター：西川 祐子²⁾

司会：三林 真弓³⁾

主催：共同研究プロジェクト「ニュータウンの未来像」

三林真弓（司会）：時間が過ぎていきますので、そろそろ始めさせて頂きたいと思います。このところ急に冷え込んで参りました。今日はお寒い中、また、お忙しい中、お集まりいただきまして、どうもありがとうございます。

本日、司会を担当させていただきます、京都文教大学臨床心理学科の三林と申します。開会に当たりまして、多少この講演会に至るまでの経緯をご紹介させていただきたく存じます。主催をしております、京都文教大学人間学研究所は、本学の大学の教員がそれぞれの学科を越えて、共同研究が出来る場を提供してくれています。こちらにおります西川と私、三林を代表とする10名ほどの3学科の教員で構成されている「ニュータウンの未来像」の研究班では、大学に隣接されています、グリーンタウン槇島と向島ニュータウンを研究対象と定めて、ニュータウンが現在直面する課題を明らかにし、未来を探っていこうという目的で研究を進めております。ニュータウンを文化的、社会的、それから、臨床心理学的な角度から捉えていこうとするこの研究プロジェクトは、昨年度秋には、大学が位置しています宇治市内におきまして、宇治市男女共同参画支援センターと、科研費補助

「ニュータウンにおけるジェンダー変容」の共催によって、「集まって暮らす～ジェンダーをひらこう」というシンポジウムを企画いたしました。シンポジウムの詳細につきましては、お配りしました報告書の抜き刷りをお読みいただければ幸いです。昨年のシンポジウムでは、「ひらく」というキーワードから「つなぐ」というキーワードが生まれました。時代を「つなぐ」、大学と地域を「つなぐ」、個と個を「つなぐ」、そんなところから今回の公開講演会が企画されました。2時間という限られた時間ではございますが、本日おこしの皆様、様々な領域をご専門にされていますでしょうが、時間と空間を共有いたしまして、「つながる」感覚を持ちたいと考えております。これから1時間ほどで講演をいただき、その後、コメンテーターよりコメントを10分ほどしていただき、残された時間は、皆様から忌憚のないご意見、ご感想をいただきながら、ディスカッションの方を深めて参りたい、そんな風に考えております。

前段が長くなりました、本日、ご講演いただく篠原聡子さんを紹介致したいと存じます。篠原さんは、現在、日本女子大学家政学部住居学科で教えておられると共に、空間研究所という

1) 日本女子大学家政学部住居学科 助教授

2) 京都文教大学人間学部文化人類学科 教授

3) 京都文教大学人間学部臨床心理学科 助教授

設計事務所を主宰されておられます。ご専門は住宅の設計で今最も注目される建築家のお一人でございます。大阪府営泉大津なぎさ住宅をはじめ、グッドデザイン賞を受賞されたスペーシャル砦やレーテ・たまプラーザなど多くの作品があります。著作も非常に多く、『変わる家族と変わる住まい』他たくさんお書きになられています。昨年度のシンポジウムでもシンポジストとして、赤羽台団地の共有空間と在宅ネットワークでご発表いただきました。東京北区にあります赤羽台団地でのフィールドワークのお話で、昭和30年代・40年代公団が憧れの居住地だった頃のお話をたくさんの映像とフィルムを使ってご説明いただきました。今回の演題は、「個をつなぐ住まい」、サブタイトルが「“住む”側の実験と“建てる”側の実験」でございます。都会で古い一軒家をシェアして住んでおられる方々に、聴き取りをされたフィールドワークとご自身が設計された住まいに、それを通してこれからの家族、個人、住居のあり方についてご講演いただきます。それではどうぞよろしくお願いいたします。

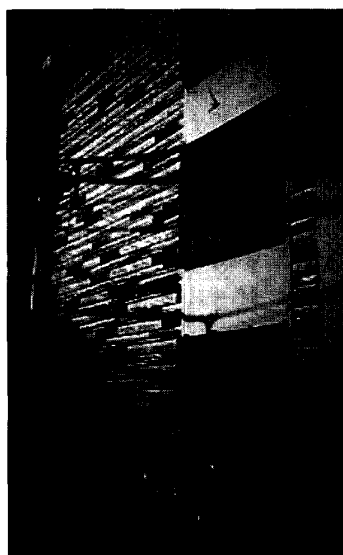
篠原聡子：

1. 建てる側の実験—ワンルームマンション、デザイナーズマンション

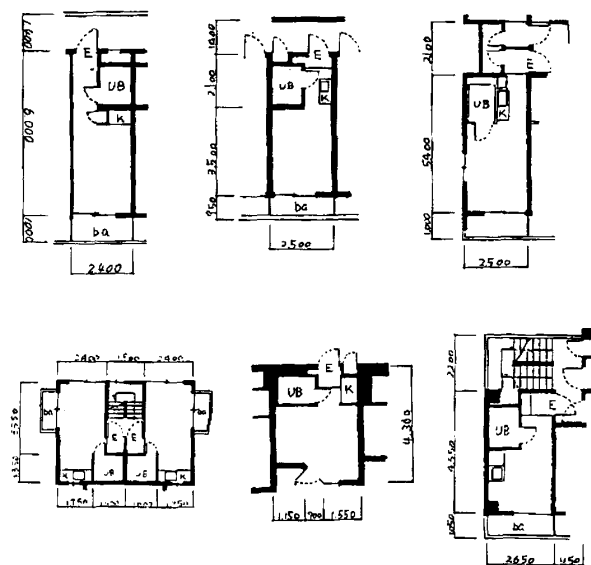
ご紹介にあずかりました篠原と申します。今日はよろしくお願いいたします。ここにこの不思議な、なんとも言えない映像が出ているのは、西川先生の御本にもかつて紹介されていた、メゾン・ド・早稲田というワンルームマンションです（資料1）。私達の仕事は、今でこそデザイナーズマンションという素敵な名前と呼ばれていますが、最初にやり始めた頃は、ワンルームマンションといわれまして、建築家がやるような仕事ではないと言われていたわけです。これは、さすがに私達の作品ではありませんで、ほんとに最初の頃の70年代、はしりの頃のワンルームマンションで、多分これは鉄骨造なんだと思うんですが、1住戸が16平米。皆さんの中にもお若い方いらっしゃるんで、ワンルームにお住まいの方、あるかと思いますが、今

では、16平米のワンルームはかなり規制によって出来なくなっていて、18平米ぐらいがミニマム。そもそもワンルームマンションなんて、建築界ではゴミみたいな扱いでした。建築の方はご存知だと思うんですけど、ワンルーム規制条例などがあったり、とにかく出来るだけ社会に存在をさせない方がいい建築ということになっておりました。

で、皆さんのお手元にあるこの資料の一番上にあるのがその頃の、建築家の黒澤隆さんが採取したものだと思うんですけど、ワンルームです。いろんなバリエーションがあります（資料2）。大体、ここに、これが間口2.4m、奥行6m



資料1
メゾン・ド・早稲田外観



資料2 さまざまなワンルーム

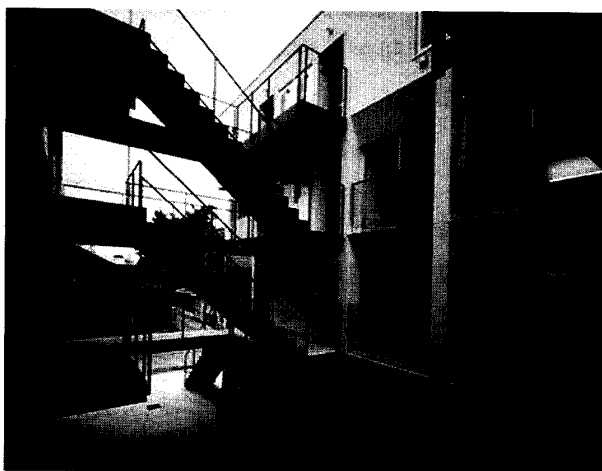
でかなりスタンダードな感じのワンルームです。間口2.4mって言うのは、間口としてはミニマムですね。ミニマムな寸法が何から決まってくるかという、間口はユニットバスを置いて、脇を通れる寸法、2.5mという階高は、ユニットバスを置いて、換気扇のダクトが通る、ミニマムな寸法。とにかくミニマムな寸法をあつめて極小空間を詰めていって、ぎりぎり6畳弱ぐらいの居住スペースがとれる。そういうミニマムな空間をワンルームマンションと言っていました。この大きさが決まってきたのは、ユニットバスのような身体的な寸法もあるんですが、もう1つは、やっぱり投機の為に造られたものだから、そうした制約もありました。サラリーマンが、自分の給料のあまりで投資をするということで、そうするとサラリーマンが年収の何分の1ぐらいは当てられて、不動産を持てるという。そうすると、このぐらいの値段がマックスだよっていうところから、大きさが決められてきたってというような話も聞きます。そういう意味で戦後のたとえば51C型といわれる、2DKのプロトタイプがあるわけなんですけども、そういうような家族の実態であるとか、食寝分離であるとか、理念に裏づけされた住宅の作られ方とは全く違うところから生み落とされた建築であったわけです。ところが、東京ですと大体この16m²のワンルームで8万円ぐらいしますから、借りるほうの立場からしましたら、ミニマムといいながら、若年の単身者が住める大きさとしてはある意味、妥当性があったようにも思います。ただ、ワンルームに住む方たちは学生さんや若いサラリーマンが多かったので、ゴミ出しのルールは守らない、違法駐車はする、夜中に騒ぐということで近隣にとっては大迷惑建築ということになり、ワンルーム規制条例などが出来て、排除される傾向にあった建築でした。私達が、仕事を始めたのが今から18年ぐらい前ですけど、最初はバブルだったのでそれなりに仕事はあったのですが、バブルがはじけて、なかなか仕事がない中でお声がかかったのが、ワンルームマンションだったというわけです。

仕事がないからやっていたというのものもあるんですが、自分たちとしてはワンルームマンションっていうのはとても面白いんじゃないかと思ったわけです。建築家というのは常にネガティブな状況をどれくらいポジティブに転換できるかっていうのが、力量の1つだと思っているので、いつも篠原さんは悲惨な条件の中でよく頑張るねって言われるんですが、へそ曲がりなので、そこからなにか新しいヒントがないかなっていつも考えているわけです。ワンルームマンションが面白いって思った理由というのは、例えばですね、日活ロマンポルノから、その後活躍する監督がたくさんでたということですが、当時、若い監督さん達がいっぱい作った。それはセクシャルなシーンを入れさえすれば、あとはストーリーの展開は何でもいいということいろいろ自由に出来たという話を聞いたことがあります。ある意味ワンルームマンションも利回りですね、要求された個数だけ部屋が取れば、後は何をしてもよかったですね。だから、最初から建築として期待されていなかったぶんだけ、私達は、自由に仕掛けることができた。それじゃあプライバシーがどうなるんだとか、日照は、どうなるのかとかそういうことすら言われなかった、ということです。

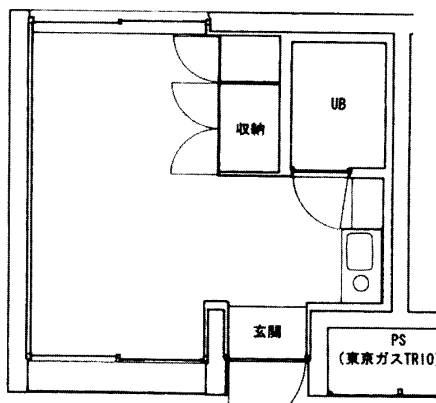
一般的な集合住宅が非常に難しかったのは、家族、標準家族というものを前提に作られたので、健全な家族のための健全な住宅、安全、それからプライバシー、日照などは数値的に決まっているところがあって、隣棟間隔は何mとか日照時間は何時間以上って言うのがきっちり決まっている。最近でも分譲のマンションはその状況が変わっていないんですね、私達がなかなか分譲の仕事に入れないのはそういう、規範っていうのが今でもすごくきっちりしていて、75平米だったら、3寝室は必ず取る、洗面カウンターの間口は、1.2m以上は必ず取る、廊下は85cmで、どんなにそれがコンパクトタイプになっても、分譲は3点っていうか、お風呂とバスは一緒にすることが出来ないとか、いろんな制約があって、なかなか自由にならないわけなんですけど、賃貸でしかワンルームということ

で、ほとんどディベロッパーの方は数とコストと、それが決まれば利回りは決まるわけなので、それさえ確保してくれればいいよというような感じで、私達としては自由にできる余地がある。

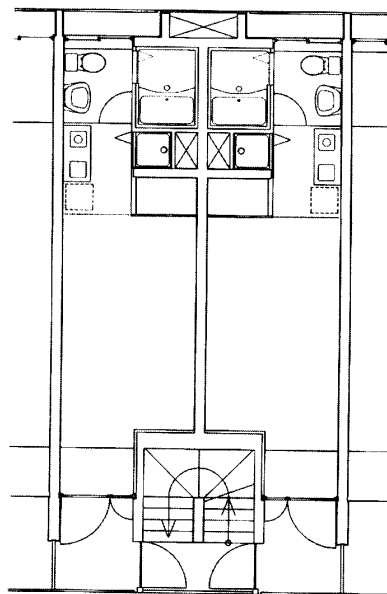
今からワンルームの作品を3つ見ていただきます。1つはコルテ松波といいます。コルテというのはイタリア語で中庭という意味ですけども。あるゼネコンの社宅として借り上げていただいたものです。作りとしては、食堂があるわけでもなく、共同のお風呂があるわけでもなく、単純なひとつひとつ部屋が分かれている、ワンルームです。2棟ドーンと建てましてですね、間をブリッジで繋いで、片廊下というものがない。ワンルームにはいろいろ意地悪な条件が付いてまして、これは千葉市なんですけど、千葉市も出来るだけワンルームを作らせたくないの、作るときは全戸数の3分の1の駐車場をつけないさいということで、この中庭を車が走るよう



資料3 コルテ松波 中庭



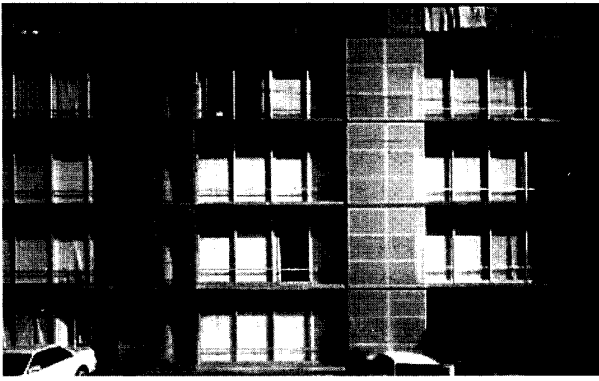
資料4 コルテ松波間取り図 (17.53m²)



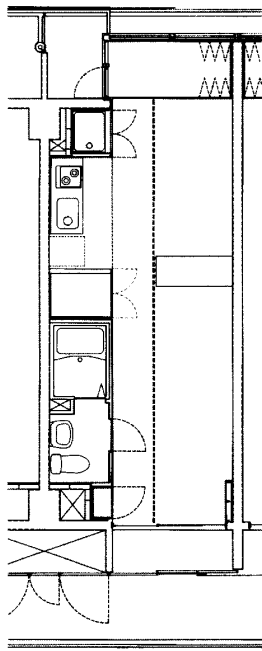
資料5 リガート間取り図 (20.76m²)

になっていて、前面と、この裏にあと4台止まれるようになっているわけです。中庭に道路を引き込んでしまうような仕掛けになっているわけです。中庭と言うとクローズなイメージなんですけど、この場合にはほんとに都市に開放してしまったような形の中庭を作りました(資料3)。

これはお手元の資料にもありますように17.53平米でミニマムの16平米よりは気持ち大きくしたところとプロポーションが先ほど上にあるものと違って、間口をちょっと広くしたということがあります(資料4)。間口というのは集合住宅にあっては、基本性能というふうに考えているので、どうせ広い面積が取れないのであれば、出来るだけ間口をとって、採光がたくさん入るような住戸にしたいと考えていたわけです。今だとセキュリティの問題があるので、こんなにオープンに出来ないのですが、これが1994年で千葉ということもありまして、かなりカランとしたパブリックな感じの、コモンというよりはパブリックな感じの中庭で、2つの住棟がつながっている。単身者居住というのは、一戸の住宅がすごく小さいのでなかなか自己完結をすることが出来ないというのも私達が面白いと思った理由のひとつで、そうすることによってこの中庭にアクティビティが、あるいは都市の中にアクティビティが出ていく、都市と非常



資料6 アペルト外観

資料7 アペルト間取り図
(35.27m²)

に密接した環境の中で成立している居住形態だ
なと思って、こういう形を提案をいたしました。

この建物のすぐ近くに1998年にリガートというワンルームマンションを作りました。リガートというのは横縞という意味なんです。自分たちは建物の名前をつけるときに、形態ですね、建築言語の1つをとってつけることにしているんですが、私達の仕事は、結局それに尽きるという思いでつけています。リガートは全20戸で、1住戸の大きさが20.76平米です(資料5)。これも片廊下を止めて、階段室から、バルコニーから中に入って縦に抜けているような形の住戸です。この時は、中庭はないんですけど、こちらがすぐ通りで、道路があってオープンな駐車場があってすぐ住戸なので、通りとの間に

バッファーを設けると共に、そこに気持ちのいいバルコニーがあることによって、人はここから入ってきますから、内部空間と外から入ってきた人が、接続する気持ちのいい外部空間が出来ないか、と言うのが1つの提案でした。これは住戸の中の写真ですが、今入ってきたところのバルコニー兼エントランスのところですね。これは水周りのところですね。チャンスがあると、学生と一緒に設計した集合住宅の住まい方の調査をさせてもらうんですけど、当然、細長い住戸なのでベッドはこんな風に置くのかなと思ったら、ある住戸ではベッドはなぜか横に置かれていて、ベッドをまたいでお風呂に入ることになっていた。他の居住者ですが、さっきの入り口のところに、本箱が作ってあって真っ暗だと言われたんですけど、窓のところに全部本箱をつけられて、真っ暗だといわれてもちょっと困るかなと思いましたが。なかなか私達の想像を超えるような住まい方に、フィールドワークをすると出会うわけです。

これが2000年に設計したアペルトという集合住宅です(資料6)。そのときは全24戸で一番右の図面で35.27平米が1住戸の大きさです。この時は何を考えたかって言うと、こちらが片廊下があってズボンと細長い2.5mなんです。細長い空間を作ってここに可動家具があって、ここにカーテンレールが流れているのですが、こちら側を寝室にしてもいいし、片側によせてワンルームにしてもいいし、可変性を持たせることで、ひょっとしたら35平米ぐらいあると、SOHOというかオフィスに使ったりする人もあるだろうし、いろんな人が住める形ということを考えてこういう間取りを作ったわけです(資料7)。見ていただきますと分かりますように1994年の17.53平米が、1998年になると20.76平米になって、2000年になると35.27平米になる。これは、全部同じディベロッパーの仕事なんです。立地もすごく近いところにあるんです。それでなんで変わってきたのかと、私達はそんなに小さいものを作りたいわけではないので、出来るだけ大きい提案をするんですが、残念ながら住戸の大きさなんかは、ディベロッパー、開発者が決

めて私達に後はつめるだけつめてくれというような話になります。それはマーケティングをやって出される結果なので、今のところ私達はその辺には踏み込めていないんですが。

ちょっとずつワンルームが大きくなってきたのは、市場のニーズに対応したということで、市場のニーズを支えたのは何だったかというと単身者ですね。以前は若い人の1人住まい、学生、若年労働者の1人住まいで一時期の経過的な住まいであったわけですけど、そのシングルっていうのがひとつのスタイルになって、単身居住者といっても必ずしも若くないし、必ずしも学生ではないし、必ずしも短期間そこにいるわけでもなくて、仕事をしながら長くそこに暮らすような暮らし方も出てきて、単身者居住の多様化が、市場のニーズの背景なんだろうと思います。ちょうどその頃、2000年ごろから頻繁に『BRUTUS』とか『Pen』などの雑誌にデザイナーマンションという言葉が踊り始めまして、なんとなく今では、何でもいいよ、面積さえ取れてればっていうようなノリから、「このデザインのコンセプトは何ですか」と聞かれるようになってきて、デザインが1つの売りになってきたという状況です。商品として、先生これはコンセプトとして見えにくいですねと注文をつけられるようになってきて、どっちがデザイナーか分からないな、なんていう状況が出てきたわけです。ですから、面積がちょっとずつ大きくなったというのは、見ていただければわかると思うんですが、それと床暖房ぐらいは最低つけて欲しいとか、設備の充実がありますし、デザインへのニーズも高くなってきたということです。

私達は賃貸の仕事をしていて、現実とある種向き合っていてそれに応答するような仕事をしていかなければならないのですが、ただ相手から与えられるだけの条件をクリアしてこれが出てきたわけでもなくて、ある種のチャレンジをしてきたわけです。それを整理してみると、住居の基本的な性能というのは、人と人をつなげるということと、人と人を隔てるということ、隔てるということはプライバシーという言葉

葉で言われますし、接続をコミュニティとかコミュニケーションという言葉で言われることもあるんですが、私達が基本的に操作できるのは物理的な環境なので、接続と隔離、わりと直截な言葉で整理をするようにしています。結局プライバシーの方は、戦後プライバシーを守る方法としては、床の厚さは25cmあると重低音をコントロールすることが出来るとか、視線をカットする方法とかいろいろシミュレーションされてきたのですが、接続ということは必ずしも各住戸で、スタディをされたわけではなくて、大きな団地ですと集会所とかコミュニティセンターとか児童公園とかそういう仕掛けはあったけれども、住戸一つ一つがつながるようなそういうレベルでの工夫があんまりなかったかなと思います。個に分解されたワンルームは1人の住まいですから、人と人がつながるような仕組みも、プライバシーを守りながら入れないといけないんじゃないかと思いましたが、ワンルームの設計というのは、接続の可能性を探るという行為であったというふうに思っています。

私はちょうどコルテトリガートの間で教員になっているんですが、大学でのフィールドワークが1つの要因になっていて、ある学生が私のところにきて、卒業論文を書きたいといってきて、「私もワンルームマンションに住んでいるけど、半径200メートル以内に知っている人が誰もいない、これはすごく変だと思う」と言われた時に、21、2歳の若い学生がそういうことを感じながら、ワンルームに住んでいるのだということが私の年代にしては、目から鱗であったわけです。出来ればいろんな人と関わりたくない、プライバシーが大事だと、干渉されたくない、うっとうしくないほうがいいと思っているのかなと思っていたんですけど。ひょっとしたら私たちの接続というのは、建築家のおせっかいで、共用・空間フェチっていうか共用空間を作るとなんかやった気がするというような、しばしばおせっかいかなって思いながら来たところもあったんですが、その学生のそういうスタンスに触れて、じゃあ一緒にいろいろ見てみよ

うということになり、そこから何年も単身者の調査をしたわけです。そういう背景もあって、もう少し住戸と住戸のレベルで接続をさせる可能性が図れないかということが、ワンルームをやってきた背景にあります。

Ⅱ．住む側の実験―シェアハウス、コレクティブハウジング、老人ホーム

今日は3部構成になっておりまして、ワンルームという中での私たちの試みを今お話ししてきたわけですが、次に住む側の試みについて、お話ししようと思います。そして、最後にもういっぺん少し成長した私達の試みについて、ふれたいと思います。新しい住まい方、新しい関係性にチャレンジしているのは建築家だけではなくて一般の居住者の事例が私達にとって大変刺激的であり、いろんな方にとって面白いのではないかと考えてここにいくつかご紹介したいと思います。

これは、「沈没家族」の家といい、その筋の方にはかなり有名な人たちなのでご存知の方も多いのかもしれませんが、私達が『変わる家族と変わる住まい』という本を書いたときに取材をさせていただいて、東京の都心の住宅密集地にある4階建てのビルにシングルマザーとその子ども、そして単身者が一緒に暮らしている住宅です。シングルマザーで写真家のアキさん、20代後半は、仕事をしながら子育てをして行くのは、1人ではとても難しくて、共同で育てるしかないと思い、同じようにシングルマザーとなった友人2人で一緒に育てようと考えた。しかし、生まれたばかりの子どもを働きながら育てるのは、母親2人でも大変なことなので、ピラ配りや知り合いを通じて保育人を探し、共同保育を始めた。そのときに知り合った保育人とこの2組の、保育人って言うのは男性なんですけど、この2組の親子が5年後に沈没ハウスで暮らし始めた。その後同人誌で沈没ハウスを知った、もう一組のシングルマザーの親子も合流し、現在3組の親子と男性2名の8人家族である。大人は全員血のつながりの無い他人同士。ちょうどこれは夕飯時で、お酒を飲む人あり、料理を作る人あ



資料8 沈没ハウスの暮らし

り、とりたててルールとかいうのはなくて、子ども達がいて端から出来たら食べるという感じですね。子どもたちもそれぞれ空間を持っているわけですが、なんとなく境界があるような、無いような感じの住まいです（資料8）。彼女達を1つの共同生活に導いたのは、子育て、シングルマザーという環境なんですけど、単に大変だからということだけではなくて、自分たちが新聞を作ったり、ホームページを作ったりして、自分たちの暮らしかたを発信しているってところが、これは実験なんだろう、本人達も実験って言う自覚がすごくあるんだなっていうふうに思ったわけです。

同じく、実験という意味では、これもシェアハウスという実験です。松陰コモンズ、松陰というのは、場所の名前で東京の世田谷区の松陰神社って言うのがあって、そのすぐ近くにある築100年以上の民家でのシェアハウスです。私達が聞き取りをさせていただいた時には、女性が5人、男性が2人で住んでいました。実はですね、全部が築100年なわけではなくて、ここにですね、昔の田の字型プランが見えてくるかと思うんですが、これがちゃんとした玄関なんですね。この辺は土間があったかなと思いますが。この辺りは増築です。増築の部分が個室になっていて、6畳から4畳半くらいのところにそれぞれ、4万から5万くらいの家賃で住んでいらっしゃるということでした。2階にも部屋があります。この賃貸のシステムっていうのは、コレクティブハウジング社というNPOがあって、そこが一括でここを借りてい

て、家賃をまとめて大家さんに払っている。大家さんのほうもすぐ隣に住んでいらっしゃるのですが、相続税をどうしようかという問題があるけど、いますぐにはここを壊したくないという気持ちで、当座の固定資産税ぐらい払えればいいやというようなことで、時間が限られたプログラムになっています。最初に大家さんはこの話を世田谷区役所に持ちこんだらしくて、世田谷区役所経由で集まったと聞きました。

これが昔の民家のところで、これが玄関ですね（資料9）。皆さんは通常この玄関を使っているわけではなくて、玄関入ったところに受付みたいなのがあって、さっきの座敷の続き間を開放して、例えば落語をやったり、ちっちゃな演劇をやったり、そういう地域に開くようなイベントをやっている。その時は本来の玄関を使って、この辺が受付になる（資料10）。住人は裏木戸を入れて、お勝手口が日常の玄関になって



資料9 松陰 commons 玄関



資料10 受付の役割を担う空間

いる。昔のように続き間が広がって、宴会のスペースになったり外の人を呼ぶスペースになったり、イベント空間になっているっていうのが、昔の通りに使われているなって感じです。これも改修はしてあるんですが、真ん中にあるダイニングキッチンで、入ってくると必ず、この前を通って、誰かいれば一緒にお茶を飲むかなってような感じです。私の知り合いが住んでいて、インタビューをしました。歳は33、4、5、あたりでしょうか。恋人もいていずれ結婚しようかと思うんだけど、何かチャレンジをしてみたいというのがあって経済的な理由もあるし、さっきのワンルームじゃないんですけど16平米に8万円払うのは耐え難いということで、こういう選択をしていると話していました。

冷蔵庫の中を何で撮ってあるかということ、これはさっきの沈没ハウスとは違って、一人一人の境界がしっかりしていて冷蔵庫の中も境界があってですね、棚が個々に分けられていて、調味料だけは共有するということですね。ここにお当番表というのがあって、例えばゴミ出しとか、玄関の掃除とか、誰がやるか7人の名前があって厳密にそれを守っている。このところに、どうもありがとうというFAXがありますが、彼女、彼らもホームページも開いていま



資料11 共有の冷蔵庫の上部にファックスの返信や当番表を掲示

すし、小冊子なんかも作っていて自分たちの状況がどうなっているのかを発信しているので、時々一緒に住みたいというFAXが来るそうです。そうするといつ空く予定があるとか、無いとか、短期間だったらいられるよってというような応答をして、その返事がこれなんだと思います（資料11）。

個室は見せていただけなくて、ここで暮らしているコツはすごく一人一人が自立していて、風邪をひいても誰の世話にもならない、例えばおかゆを作ってあげるなんてこともほとんど無いそうです。だからほんとに、大変な病気にならない限りは、自分のことは全て自分でやる。共有空間にいるときには話もするけど、それ以外、空間を共有するということと個人の生活をしっかり分けていて、そういう意味で依存心が強い人は一緒に暮らして行けないというふうに言っていました。

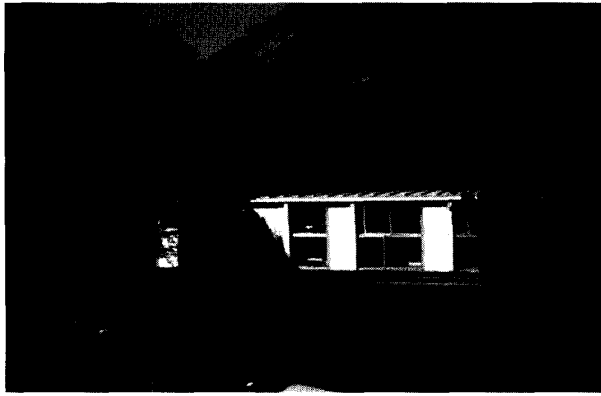
彼らがこの家に住み始めた時には、よくあることなんです、古い家のしっくい壁の上にビニールクロス張っちゃったり、ペンキ塗っちゃったりとかしてたのを下地を全部出して元の材料を全部出して、元の形にして住もうということで、多少素人がやっているのでもよもよしているんですが、昔の姿を戻して住み始めたということです。ここはいつもいつもイベントをやっているわけではないので、好きに使ってよくて、誰かの親御さんが来て泊まるとか、5人の女性の内1人は、60歳代で、これから自分たちのコレクティブハウスを立ち上げようというふうに思っている方で、この方は、お嬢さんも結婚していらして、ご家族があってお孫さんを連れて泊まりにこられることもあるそうです。

今までの既成の家族じゃないユニットっていうのがいろいろあり、その契機も子育てであるとか経済的な理由であるとか、もう少し実験的なチャレンジの精神であるとか、いろんなことがユニットを作っていく契機になる。血縁以外の契機がユニットをつくり、それと建築の形がリンクしているっていうのは、特別養護老人ホームで家族を超えた住宅の形っていう意味では、非常に面白いかなと思ってこの例を紹介を

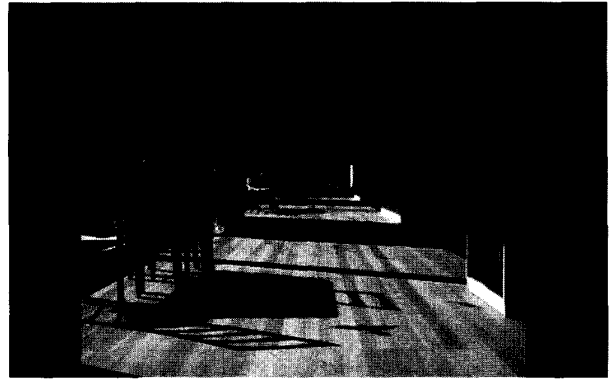
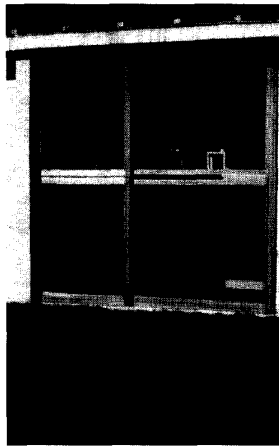
したいと思います。

これは特別養護老人ホーム、千葉にある「風の村」です。今ではもう珍しくは無いのですが、4畳半くらいの個室があってグループホームがいくつか重なったような形で、ここにリビングがあって、こういうユニットが6つぐらいあるのかな。お食事は基本的に大きな厨房で作られて、ここに運ばれてくるんですね。ですがここではご飯を炊いていて、お味噌汁を温めることが出来て、食器は全部ここにある。なので出来る人はご飯をよそったり片付けたり、温めるぐらいの行為はここですることが出来る。サポートをするシステムとそれから行為を共有する空間がここにはある。普通特別養護老人ホームでは痴呆の程度とか身体のレベルとか、あと男女とかでグループが、分かれているはずなんです、ここは男女も、個室になっているから出来るんですが、それから身体レベルもバラバラな人をあえてユニットにするというふうに言ってらっしゃいました。そういう家族を超えるような新しいユニットの場合、上手くいってれば上手くいってる程、その中でクローズしていく、すると外からは排他的な集団に見えるものなんです、これは地域に開くような施設を持っていて、八街という千葉の田舎のほうなんです、近くのおばさんたちがユニットのリビングにボランティアに来たりする。エントランスの脇に喫茶店があるんですが喫茶店も地域の人たちが手作りケーキを売る、みたいなノリの喫茶店で、村の寄り合い所という感じです。このほかに文化センターといえるほどではないのですが、みんなでピアノコンサートを聴いたりというスペースがあります。

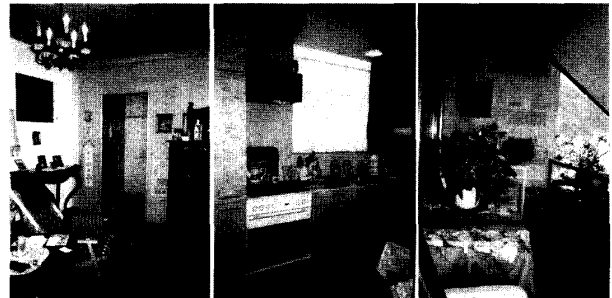
これは千葉から一気にスイスに行きます。ピーター・ズントーという有名な建築家のマサンスの老人ホームというものです（資料12）。ここにザーツと広い廊下のような不思議な空間があって、こっちが南側で住戸は北向きです。1人45平米ぐらいのユニットです（資料13）。風の村は特別養護老人ホームですが、これは基本的には自立して生活できる人のユニットになっています。この南側の廊下のようなところは、



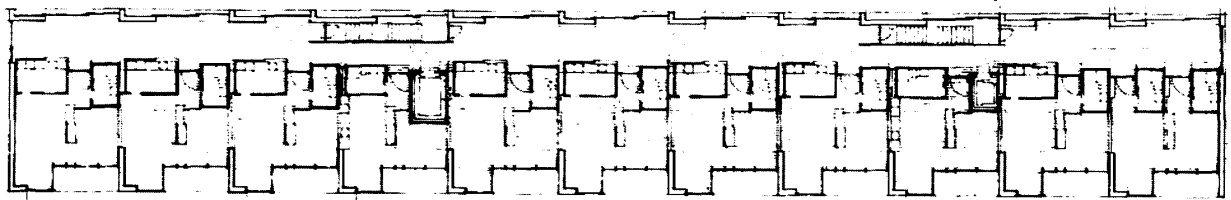
資料 12
マサンスの老人ホーム外観



資料 14 マサンスの老人ホーム廊下側



資料 15 マサンスの老人ホーム内部



資料 13 マサンスの老人ホーム間取り図

それぞれの住戸のキッチンが面していて、それぞれ作ったものを持ちあって食べるような空間になっています。それぞれに違うテーブルクロスが掛けてあって、すごく気持ちのいい空間になっているわけです（資料14）。中に入れていただいたんですが、全部自分が持ち込んだ家具をレイアウトして、地下にはすごく大きな倉庫がある。大抵高齢者が施設に入るときって、身の回りを全部整理して過去を全部切り捨てていかなければいけないことになっているんですが、ここでは自分の家具を全部持ち込んで、おまけに下に一人6畳分ぐらいの倉庫が付いていました。もともとすっきりとしたモダンなインテリアなんですけど、現在の部屋の様子はかなりこうクラシックな感じですね（資料15）。

Ⅲ. 再び、建てる側の実験について—接続の装置としての建築の可能性

ここまでは住まい主の試みとそれにリンクするような建築の形ということで見たいたんですが、自分たちの仕事に戻りまして、そういう色々なニーズっていうか家族を超えるような、しかも個人をベースにしながらつながれるような仕組みということで、一番最後にレジュメとしては、「接続の装置としての建築の可能性」というふうにタイトルがあるかと思いますが、その話をしたいと思います。それを作る一つのベースになったのが、3年前に行ったフィリピンのトンドという再開発地区でのフィールドワークでした。スクウォッターだったところの再開発の事例なんですね。この奥に見えるのが私達が行った集合住宅です（資料16）。外側は

モダニズムの建築の顔をしているわけですが、中に入ると半層ずつずれた中庭型住居になっていて、ここに出てきたおばさんが早速、ずっと近寄ってきて誰か来たなということ。現地の人に案内していただいたというのもあるんですが、この人が言ったのは、「ちょっと私の家に入りなさい」ということを言われて（笑い）、早速連れて行かれたわけなんですね。中庭に向かっては全部増築しちゃうわけですよ（資料17）。外側に向かって増築しないところはすごいなって思って、外側はある種の景観を保つという心理と中庭に向かって侵食するっていう感覚が不思議だなって思って、その辺には見えないルールがあるのではないかなって思ったわけですが。住居の中はこざっぱりとしてい

て、42平米ぐらいかな、昔の51C型、2DKと同じぐらいなんですが、お父さんとお母さんと子どもが6人いて、お手伝いさんが2人いてという感じです。なかなかさっぱりとしていて、気持ちよく住んでいました。

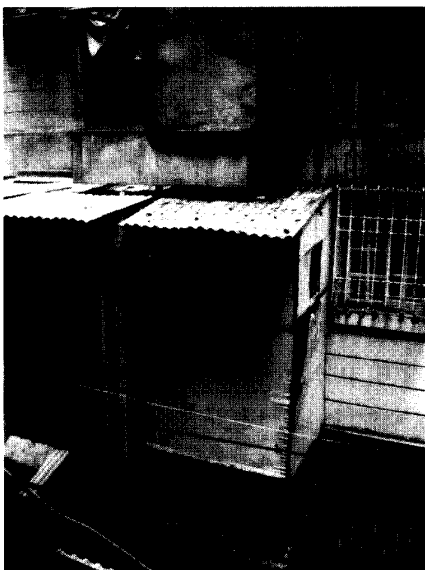
中庭に向って、みんながスモールビジネスをはじめていて、お菓子を売っていたりとか、洗濯屋さんをやっていたりとか、雑貨屋さんとか、お魚を売り始めていたりとか。何かそういうスモールビジネスがあって、私が連れて行かれたおばさんのお家も氷を売っているらしくて、みんながちょっとずつ商売をしているので人が入ったり出たりするっていうのもあまり違和感なく行われているのかなって思ったわけです（資料18）。色々な形、階層の住宅をみまし



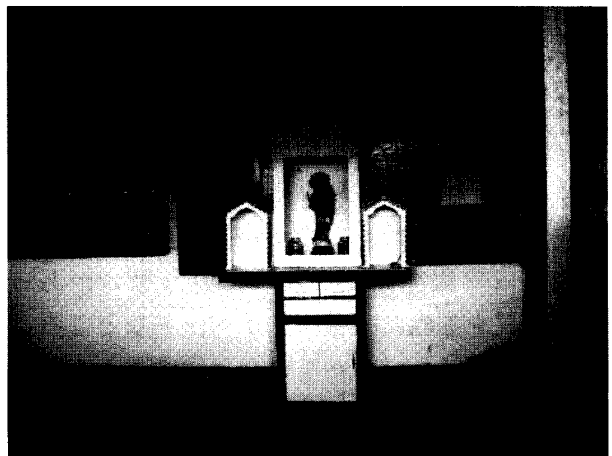
資料 16 トンドの集合住宅外観



資料 18 中庭に面したスモール・ビジネス



資料 17 中庭に向かう増築箇所

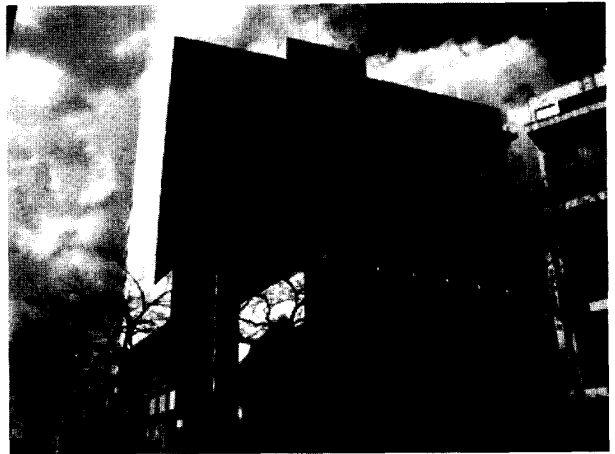


資料 19 マリア像

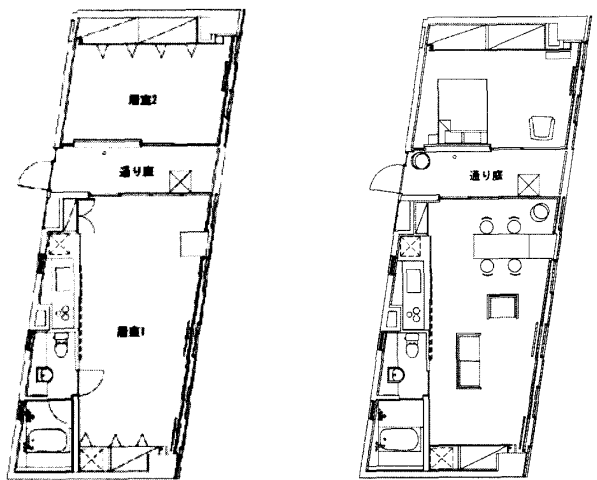
たが、どこにも、バスケットコートとマリア様のほこらがあって、空間の核のように思えるように思えました。これは中間層のタウンハウスのような住宅なんですが、その中心にもほこらにマリア様がいらっしゃるんですが、そして、やっぱりバスケットのコートがある（資料19）。

これが私達の設計にどうつながっていくのかということなんですが、ここで思ったのは2つのことで、1つはただ住むだけじゃなくって、スモールビジネスっていうかそういうものが入ってくると全然、人の動きが違ってくるということを実感しました。よく、職住近接っていうんですが、それを体感をしたということです。それと、中庭っていう住居形式、中心っていうか何か機能があるわけでもないんですが、アブセンスのある空間、なんとなく人の居場所になるような、あるいは視線が集中するような空間っていうのが、いろんな空間をつないでいるなと。これだってバスケットのゴールがあって、ほこらがあるだけなので常にバスケットをしているわけではないんでしょうけど、なんとなくこの辺に子ども達がたむろっていたりとか、そういう空間の大切さを思いました。建築としては中庭型みたいなものの力というのは、集合住宅としては大きいかなって思いました。

最後に2つ私達の仕事を見ていただくわけなんですけど、これはレーテたまプラーザという18戸の集合住宅です（資料20）。これは微妙に傾いていて全部南向きになっていて、可動の日よけのスクリーンが付いています。この住戸はこっちに片廊下があるんですが、真ん中にポーンと通り庭を入れて住戸を半分に切断しているわけです。そうすることによって普通バルコニーって住戸の外側に付くんですが、バルコニーってほんとに接続空間だよねっていう思いがあって、接続するのに一番プライベートなところにあったらいけないじゃないかと片廊下からアクセス側に持ってきたのが通り庭です。そうするとなんとなくこの辺に大切な自転車を置いてくれたり、少し外部とつながれるような空間が展開できたのではないかと思います。これくらい大きくなるとですね、実際にどういう人が住ん



資料20 レーテたまプラーザ外観



資料21 レーテたまプラーザ間取り図 (59.91m²)
と住まい方事例

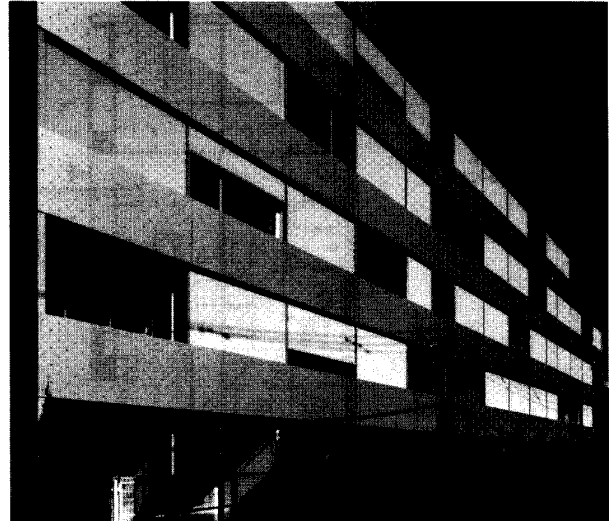
でいるかという、メイクアップアーティストの方が住んでいて、こっちをスタジオにしてもらって、こっちに寝泊りをしているというふうに、完全にここでパンと分けることによってかなり抵抗なくスタジオと住まいが両立をしている。いろんなところに外部が侵食している（資料21）。

これが一番最後のスペラル砦という建物です（資料22）。大まかなブロックとしてはオーソドックスな配置計画です。中庭を囲んで北棟と南棟に分けて、北棟は小さく、南棟は大きく、かなりセオリー通りの作り方をしています。ただし、先ほどと同じようにバルコニーをこちらにつけてる住戸もあるんですが、基本的に縦型に置くことによって、これが75平米の3LDKなんですが、いろんな形に展開できるようになっています（資料23）。これが通り庭。こ

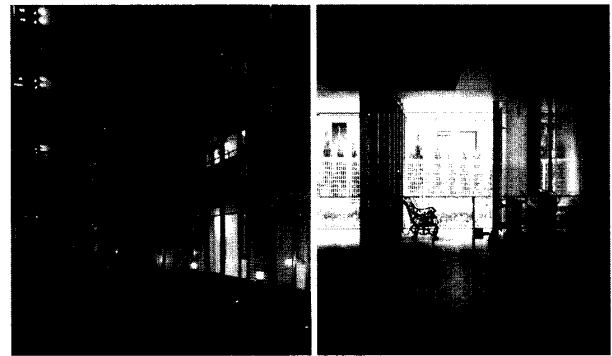
の通り庭に面していろんな出入り口があるので、部分的にこうパブリックに開放することが出来るという仕組みです（資料24）。

例えばですね、居住者の調査をしたものなんですが、これが一番スタンダードな形で75平米っていった段階でディベロッパーのほうは、絶対3寝室取らなくてはいけないというハードルがあるわけなんです。じゃあ3寝室取りましょう、ただし、ワンルームにもなるようにさせて下さいとお願いをしました（資料25）。どうなっているかというと、この間仕切りとこの間仕切りとこの間仕切りが取れてしまいます。そうするとここだけに水まわりが残るので大きなワンルームになることができます。今からお見せしますがいろんな展開があって、これは47歳の会社員のご主人と奥様は専業主婦。これがどうなっているかというとこれは3LDKのまま使っています。ただし夫婦別寝室でそれぞれにセミダブルのベッドを入れられて、LとDとも分割した、3寝室というより2寝室+DK+Lという使い方なんです。

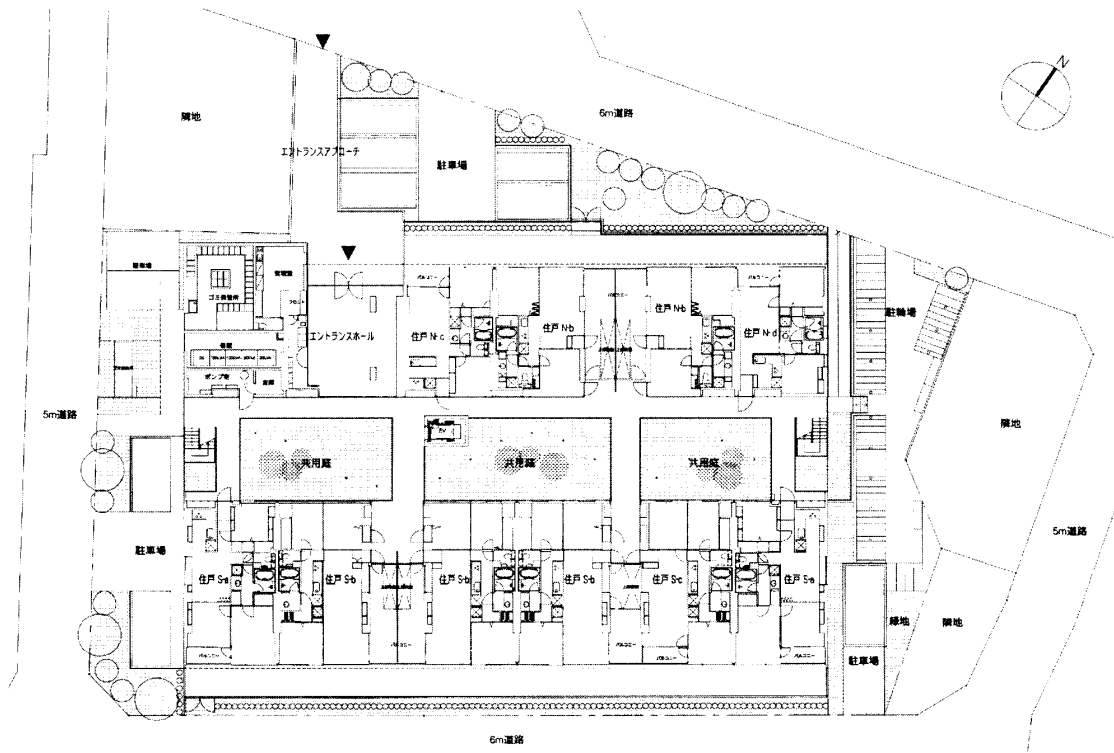
これはオーソドックスなパターンですが、間



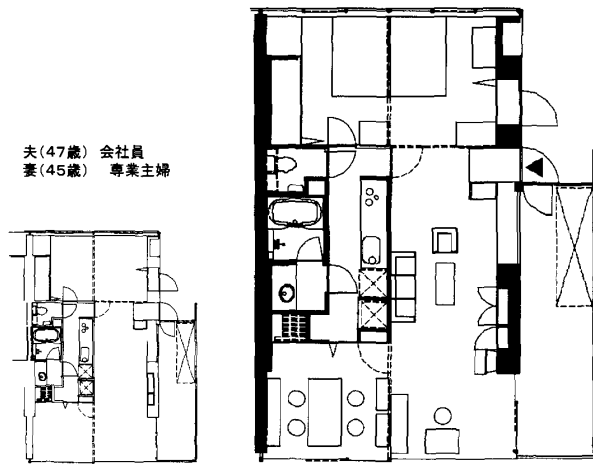
資料 22 スペラル砦外観



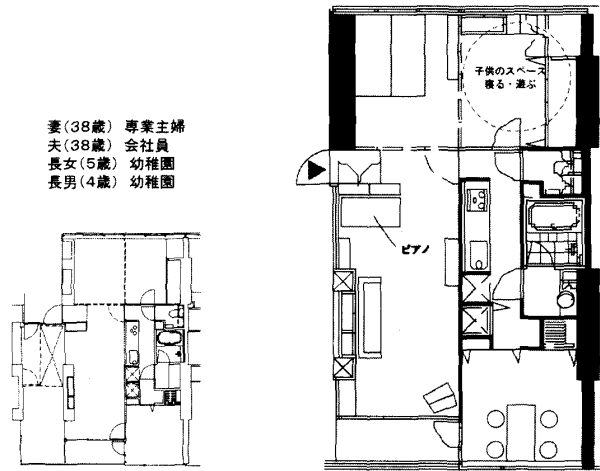
資料 24 スペラル砦 共用庭（左）と通り庭（右）



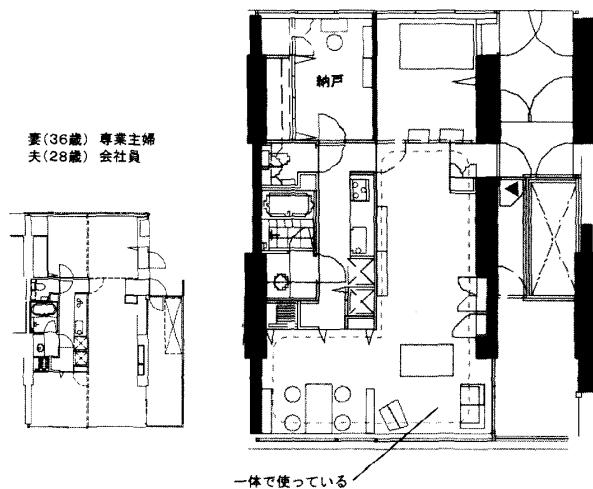
資料 23 スペラル砦全体図



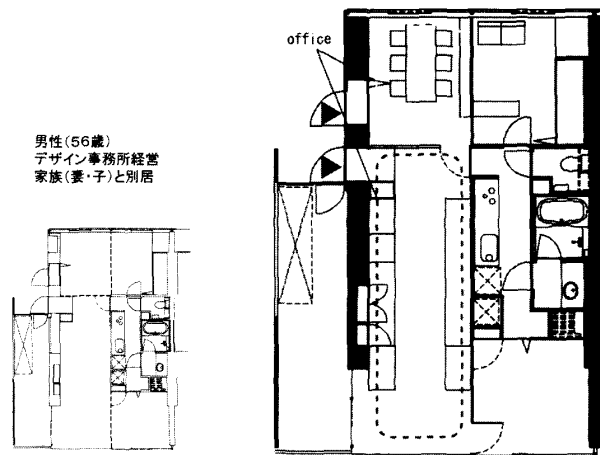
資料25 スペーシャル砦住まい方事例1



資料27 スペーシャル砦住まい方事例3



資料26 スペーシャル砦住まい方事例2



資料28 スペーシャル砦住まい方事例4

仕切りだけとってLDKを大きくして使っていて、奥様とご主人、きっとこれはワンペットルームでこちらが全部収納になっている（資料26）。これは子どものスペースとLとDが分けて使われている（資料27）。

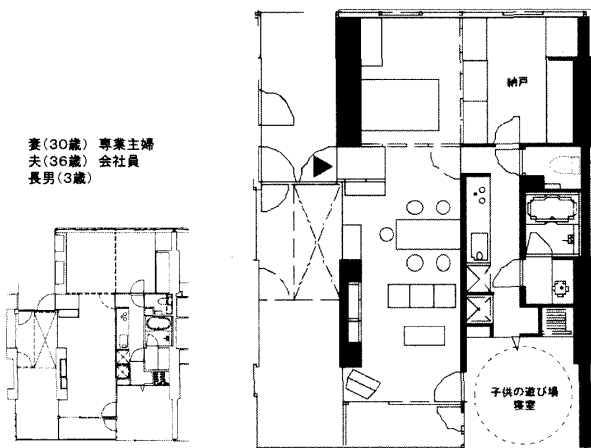
この方は、こちらで事務所をやっていて、58戸のうち10戸ぐらいがSOHOをやっているんですが、この方のSOHOが多分一番大きい。あと金融公庫を使っているの、必ず住まなきゃいけないというたがあるの、この方はここにお住まいになっていて、こちらが完全なプライベートゾーンになっていて、ここが打ち合わせ室で、ここが事務所、デザイン事務所として使っている。お客さん用の玄関と自分たち用の出入りの玄関を分けて使っている。こうやって通り庭があるとここからもここからも入れるので、この空間をいくつかに分節して使うことが出来

るというような試みをしました（資料28）。これは比較的オーソドックスに、納戸と主寝室と子どもの遊び場兼寝室に分けられています（資料29）。

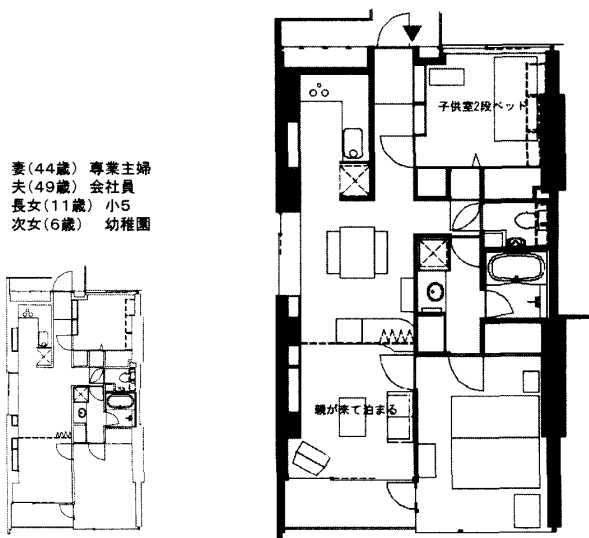
この方がキーパーソンになっていて、生協をやって皆さん巻き込んで、お子さんを通じてネットワークをつくっていらっしゃるという方で、共同通信が取材をしてくれたんですが、彼女が答えてくれてエントランスホールで話すことと通り庭で話すことと中に入らなきゃ話せないことはいろいろ違うんだっていう話をしてくれました。彼女はここのところに住んでいて、お子さんがいる。ここのところにも可動間仕切りが入っていて、行ったときにはオープンになっていたの、「これはいいませんでしたか？」って訊いたら、親が泊まりに来たときにここを閉めて使うというふうにおっしゃって

られました。これを閉じてしまってもここがあるので一応独立したものになるわけです（資料30）。

これはですね、69歳のお母様と39歳の高校の先生。お母様のお部屋とお嬢様のお部屋です。寝室が振り分けになっているパターンはわりと好まれます（資料31）。これは脇が喫煙所になっていて、この住戸もここからもここからも入れます。お2人とも働きに行っているんですが大きなキャビネットがあって、ギャラリースペースが住居空間の3分の1を占めていて、このところは閉じることが出来るんですが、一体で使っている。こういう縦長のバルコニーがお互に見えるので、喫煙所として使われていたり、外側の書斎になっていたりして目を合わせて会釈をするっていうことがある（資料32）。



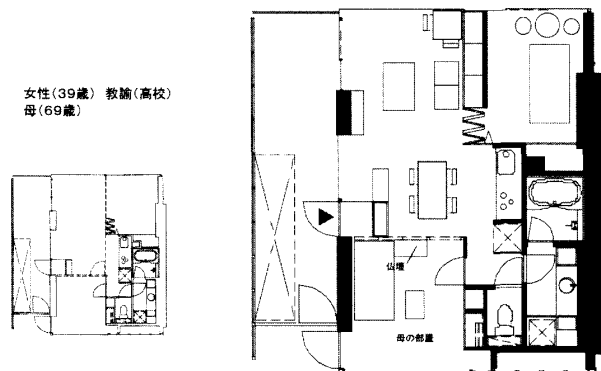
資料29 スペラル砦住まい方事例5



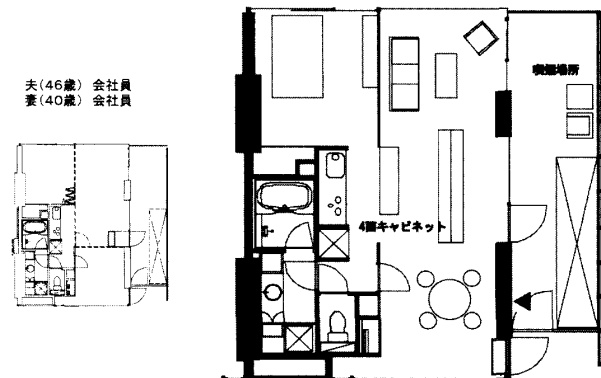
資料30 スペラル砦住まい方事例6

これは2DKのほうはすぐ埋まったんですが、2DKでも結局一部屋物置になっているとか、3LDKでも一部屋納戸になっているっていう方がけっこう多かったですね。いかに物が多いか、ひょっとしたら要らないのかなって思うんですが（資料33）。このタイプは割りと普通にこちらからだけのタイプですね（資料34）。このタイプは建築的な仕掛けをしていないにもかかわらず、実はこここのところがオフィスになっています。黒く塗りつぶされているんですが、このところは外廊下に向かって全部ガラス張りになっているので、かなりこの空間は透明感のあって、開いた感じになっているのでオフィスになっているのかなと思いました（資料35）。この場合には小さいタイプでここが寝室になっていてこここのところがオフィスになっていて、ご主人のほうがここで、デザイン関係のオフィスをしていて、グラフィックの方とか多いですね。あと自宅で翻訳したりとか（資料36）。

私達がここでやったことは、中庭という形式と縦長のバルコニーを連続させることによっ

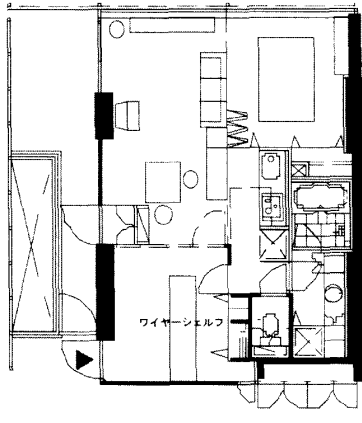
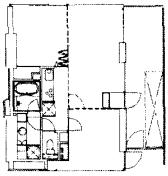


資料31 スペラル砦住まい方事例7



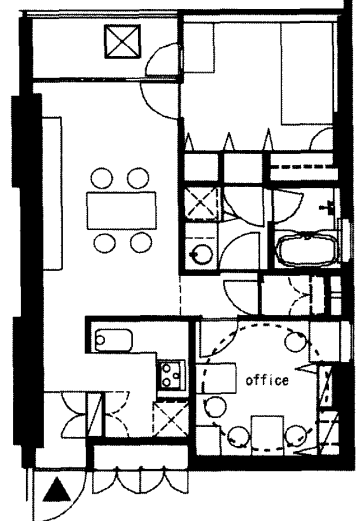
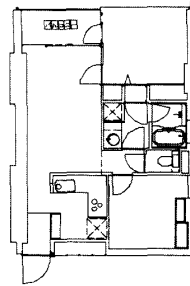
資料32 スペラル砦住まい方事例8

夫(42歳) 会社員
妻(34歳) 会社員



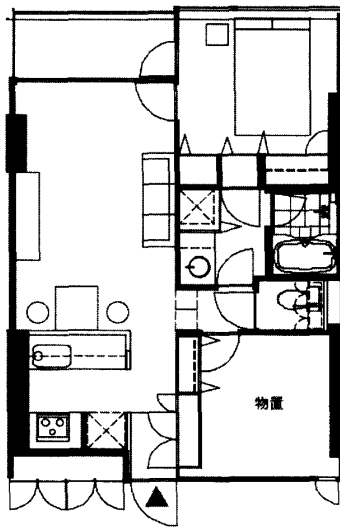
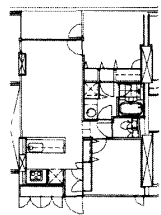
資料33 スペラール砧住まい方事例9

男性(28歳) 商工業自営



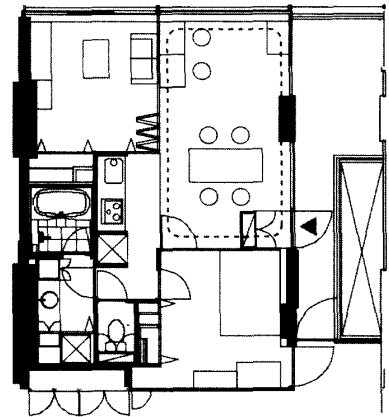
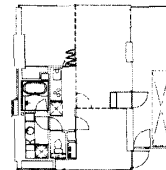
資料35 スペラール砧住まい方事例11

妻(28歳) 専業主婦
夫(29歳) 会社員



資料34 スペラール砧住まい方事例10

妻(25歳) 自由業
夫(26歳) 自営業



資料36 スペラール砧住まい方事例12

て、SOHOにも使える、ファミリータイプにも使える、ワンルームでシングルでも住める、家族でも住めるという、要するにいいところ取りをやるうとしたわけです。ワンルーム、単身者の住居とファミリーのタイプを混ぜるっていうのは、分譲ではかなりご法度になっていて、ワンルームが入ったとたんに建物の格が下がる。下に店舗が入るのもグレードを下げるんですが、とにかくグレードっていうのは決まったものを集める、ある質を確保するためには、ある質の人だけ、純粋に住居として使ってくれる人のためだけに集めるっていうことがあって、ましてや単身者なんていうのはまだ分譲の世界では、単身者用の住居は低く見られるので、これとの混在はしないというのがルールなんです、その点でも賃貸の方が自由です。物を買ってローンを組まないという分だけあるいは、ワンオー

ナーだっていう分だけ、デザインとか新しいことの取り組みが早くて、これは75平米が3寝室で展開するっていうことだけをキープしてくれれば、あとはちょっとやってみましょうというふうにディベロッパーも乗ってくれたので、多様性を内包する仕掛けというか混在を仕掛けようと試みたわけです。事務所をやっている人から、子どもを育てている人から、一人の人からいろんな人が住めるような住宅を作りたいというふうに思ったわけです。

アンケート調査をした時点で、入居して一年以内だったので、実際に行き来はありますかという話をしたときに、挨拶する程度、立ち話す程度っていうのが大変多かったんです。でも、挨拶をするとか立ち話をするっていうのは結構重要なことで、相手がここの住人だってことが相手が分かっている、そして自分も分かっ

ている。お互いに、認知、誰が誰であるかを分かっている相手と住んでいるっていうのは、自分としては重要だなと思っていて、それは、やっぱり究極一人だっていう話もあるんですが、周りの人に自分の存在を認知してもらうということは、いざというときのリスクヘッジだと思うし、個をつなぐ住まいの一番の根底のところは、やっぱりリスクヘッジで、独りで誰も死にたくないだろうっていうのが私にはありまして、誰か知っている人がいて、挨拶程度、立ち話する程度でもそれはいいんじゃないかというふうに思っています。それと、生活パターンが違う人の組み合わせが、集住体内にあるということが重要だと思います。郊外で、おなじ生活パターンでいる家族がザーッといると、ある時みんなザーッと留守になるわけですよね。お父さんが出勤して、お母さんもお買い物に出て、子どもも学校に行っているっていう環境の中で、泥棒の発生率が高かったりするのは、案外閑静な住宅街であったりする。防犯住宅の研究も少しやりました。防犯を高い塀とかセコムとかじゃない、防犯ができないかっていうふうに自分たちの計画のテーマに引き寄せてやっているんですが。そんなこともあって、そういう面の安全ということで、いろんな人がいるっていうことはいろんな生活パターンの人がいて、いろんな目があって、ある種の安全性につながるのかなという気がしています。

スペラール砧は58戸という大きさの集合住宅で、私達としては比較的大きな仕事だったんですが、58戸ぐらいというのはかなり何かを仕掛けにくい。例えば10戸とか20戸ぐらいだと中庭を囲んでみんながバーベキューやるくらいのイメージが出来るし、100戸だとかなり都市的な単位だからブロックに分けて作っていける。でも58戸というのは非常に中途半端だとも思うし、自分たちがここでやれる、ここで必要だなと思ったことは、混在を仕掛けて混在をした人たちが、自分たちがつながりたいという必要があれば、つながれる可能性を作ること、それは立ち話程度の空間の仕掛け、双方が入っていきやすい、いろんな人たちがいろんなふうに入出入り

しやすい仕掛けを作った上で、いろんな仮説、いろんな可能性みたいなものを織り込んで渡すというところが自分たちの仕事なのかな、と思ってこの仕事をしました。だいたい時間は超過しましたが、ワンルームの話と、それからチャレンジする人たちの話と最後に私達の仕事の話を見せていただきました。ありがとうございました。

三林：篠原さんどうもありがとうございました。それではコメンテーターの西川さんからコメントをお願いいたします。西川さんは京都文教大学の文化人類学科で教えておられて、ジェンダー論、およびフランスと日本の近代、現代文学を専門としておられます。ご著書には、『近代国家と家族モデル』それから『借家と持ち家の文学史』などが多くおありになります。今月20日にも『住まいと家族をめぐる物語——男の家、女の家、性別のない部屋』が集英社新書でリリースされました。この本の中には、篠原さんが設計されたアペルトについても取り上げて解説されておられます。

西川祐子：私が篠原聡子さんの作品を初めて拝見したのは、2000年の秋で、それこそ今のアペルト…、アペルトっていうのは「開かれた」って意味なんですね。イタリア語だと思うんですけど。「開かれた」というデザイナーズマンションを、篠原さんが日本女子大の住居学の院生さんと一緒に調査なさる時に同行させていただいたのが最初だったんじゃないかなと思います。途中で、写真も出ましたし、それから今回作りましたチラシの右上の写真だったかな、がそうです。場所はJRの千葉駅の北側にあるんですけども、プラットホームからもたしか見えなかったと思うんですが、建物に近づくにつれて何というか、とても不思議な建物が現れました。普通、四階建てで、24住戸のあるワンルームマンションというのと、やっぱりコンクリートの固くて重い塊と見える、そういう建物に思えるんですけども、アペルトはコンクリートで作られているにもかかわらず、不思議な透明感と軽快

さがあるのが印象的でした。その印象は、一つはさっき皆さんもご覧になったように、壁面に対する開口部割合が大変大きいということ、もう一つは、アルミサッシとアルミパンチングスクリーンがたくさん使われていて、内部に光と風を取り入れる工夫がある。外から見ると、ガラスとアルミというのは光を反射する素材なわけです。ところが、調査が済んで、帰り道に振り返ってみると、丁度今頃の秋の夕暮れの空を背景に、すでにいくつかの部屋に灯りが点り始めていたんですね。そうすると、建物全体がほうっと明るい、ホタル籠効果みたいな、内部の明かりがにじみ出すというか、とても優しい光がもれてくる感じで、全体が一つの発光体という風な感じに見えました。夜にも、お昼間とはまた違う軽快感と光の不思議な効果があったのが印象的でした。この篠原さんの空間研究所が手がけた設計には、大阪府営住宅の泉大津のなぎさ住宅など、もっと巨大な集合住宅があるんですけども、それも拝見すると何か不思議な軽快感があります。私は篠原さんの建築をどう名付けたらいいんだろう、新しさがあり、軽快感があり、不思議さがある、やっぱり未来志向の建築家と呼んだらいいのかな、それが建築家である篠原さんの第1の特徴ではないかという気がしております。

それから、2つ目の篠原さんの特徴は、批評家性を内側に持つ作家だという特徴だと思います。つまり、自作品の解説が、批評家よりももっと的確にできちゃう、そういう批評家性を内部に持った建築家であって、例えばアベルトについては、キーワードはさっきもおっしゃいましたけど、「接続」と「隔離」だと。しかも「隔離」の手段が確保されて初めて「接続」を考え始めることができる、ということをご自分でおっしゃっています。今日のタイトルは、「個をつなぐ住まい」というわけですが、「個をつなぐ住まい」という概念をこれ以上適切に解説することはできない、私はもう付け加えることは何もないという風な感じなんです。個となつてつなぐ、つなげる、つながることを考えていらっしゃる設計家です。批評家を内面に

持つ作家なので、篠原さんは言葉の使い方が今皆さんお聞きになったように、非常に正確であると思います。

3つ目は、建築家は建設する人ですから、例えば自作品が完成した瞬間に、入居前の写真をアルバムに撮っていらっしゃる方は多いんじゃないかなと思います。だって入居が始まったら、建築作品にはすぐ傷がついたり、しみができたり、生活物が内側からはみ出したり、生活臭もついてくるんだと思うんですけれども。ですから、たとえば絵画、彫刻作品だと、完成後「作品には手を触れないでください」と展覧会会場には書いてあるわけなんですけれども、そういう貼り紙をするような状態を、作品の完成した瞬間と見なす建築家がやっぱり多いんじゃないかなと思うんです。しかし篠原さんは住居学の先生でもおありになるわけであって、自分の作品のその後と、住人による住まれ方、住み方調査を行う。やっぱりこれは珍しい建築家なのではないか。建築というのは、建ててしまうと建築の中側はプライベート空間ですから、建てた人といえどもかなり意識的に無理して努力して調査をしなければ、内側には入れないものなんだと思います。篠原さんは、住み方調査をなさる。自作品の調査だけではなく、団地の建て替え問題に関わったり、今日のお話にありましたように、古家をシェアする人々の調査をする。建てる主体と住む主体は、普通今までは分離しすぎている。住む主体…、建てられた瞬間にそこからは住む人が住みこなしを始めるわけなんですけれども、住む主体の発言に耳をかたむける、そしてそのあげくにご自身が建築家なのに「欠損住居のすすめ」というようなことをおっしゃる。その点で大変、希有な建築家であると思います。篠原報告は、とくに家族で住まない住宅を言っているわけでもないし、ワンルームだけを言っているわけではなくないのですが、過ぎ去った20世紀の住宅論を考えると、20世紀の住宅論というのは、住宅イコール家族の容器、家族で住むのが住宅だという前提があったと思います。20世紀は家族の時代であり、家族を基礎単位として国作りを行っ

た、いわば国民国家の時代だったからです。

ここからは私が専攻します家族研究とジェンダー論の立場から少し篠原報告と対になるようなコメントを試みてみたいと思います。近代国家というのは、だいたいどの国家も最初は家族と財産を要する、家長と、家長はだいたい男性なわけですが、家長と手を組んで国作りを行いました。参政権は、財産を持って一定以上の税金を支払う青年男子に、まず与えられたわけであって。従って、いわゆる国民住宅、国民を国民として定着させるための装置としての国民住宅は、家長とその家族のための住居でありました。20世紀の間、住宅は家族の容器として建築されて、独身者用住居はやっぱりはっきり言って二の次であったと思われる。

でも、ちょっと付け加えますと、例えば江戸のような都市は日本の近世においてほとんど単身者の町であったと言ってもいいわけですね。江戸詰になった武士っていうのは、単身赴任者でもあったわけですし。それから産業革命直後の都市というのは、まずは単身男性、労働力としての男性の集まる都市であったと思われます。戦前の日本の都市というのは、例えば大阪の場合だと、90%が持ち家ではなくて借家に住んでいた、つまり不況になったらさっさとたたんで故郷の村に帰るといふ、そういう借家建て。借家のうちの95%が長屋だったという、そういう木造長屋建築の近代都市であったわけです。長屋にはいちおう家族が入っていたわけですが、今のように、20世紀後半のように、家族の容器としての住まいがきっちりとした規格で作られるというのは、やっぱり後半の問題であったのではないかと思います。

私はジェンダー研究、家族研究の立場から日本型近代家族の完成した瞬間というのは1975年あたりだと考えております。この1975年というのは、いろんな年表をつきあわせてみると、不思議にいろんな事の転換点、あるいはピークになった年になります。例えば、ある世代、具体的に言えば団塊の世代ですけれども、の結婚率というのはこの頃多分有史上最高ぐらいにみんなが結婚するという高率になりました。それか

ら夫婦と子どもは一人か二人という、だから近代家族モデルに現実が追いついちゃった瞬間というのも1975年前後です。また、日本の場合は、近世の離婚率というのはすごく高いわけですね。世界でまれに見るぐらい高い、明治の前半ぐらいまですごく高いわけですが、以降どんどんどんどん離婚率が減って、1975年ぐらいにはほんとに離婚しない社会になってるわけですが、1975年から今度は急激に他の先進諸国と共に離婚率がどんどん上がっていきます。経済高度成長にしたがって、子どもの数が増えるかという逆と減るといふ、そういう瞬間でもあります。

住宅事情から言いましたら、戦後焼け跡からの復興の悲願だった一世帯一住居というのが1975年には日本全国あらゆる都道府県で達成いたしました。ですから、政府の住宅政策もそれから以後は、一人一室に変わります。しかし、完成の瞬間からはすでに次の変化が始まるのであって、篠原報告の最初にあった、あれは、メゾン・ド・早稲田ですけれども、それは1976年につくられた、はっきりした日付のある発明品です。16.5平米の中に、生活サポート装置がユニットになって、いちおう全部入ってるということの他に篠原さんもおっしゃったように、1つの住戸に1人ずつ家主がつく、すごく小さいながら資産になるという、そういう仕掛けを作ったんですね。そういう意味で発明品なわけであって、その後十年もたたないうちに全国の大都市、あるいは中核都市に至るまで、蔓延して、そして篠原さんさっき言われましたように規制がいっぱいかかるわけです。

家族の個人化はその前から始まっていた。つまり、2DKから家族の国民住宅的な公団住宅は2DKから始まるわけですが、それから3DK、3LDK、さらに4LDKになるわけですが、Lがあるというのは、個室があるからこそリビングという家族のコモン空間、共同空間が必要になったわけです。

ワンルームというのは、その子ども部屋が実家から浮遊して魔法の絨毯で飛ぶかのように、よその都市に飛んで行って着陸したようなもの

じゃないかな、と私は思います。その頃から家族単位の社会の中から個人が顔を現し始めました。ところが皮肉なことに、1世帯1住戸が実現したということは、多くの国民が借金を抱えたということなんですね。住宅金融公庫をはじめとして、お金を借りて家を建てるわけですから。さらに家族にとっては、子どもの学費も負担になります。例えば大学生が2人いて、そしてまだ家のローンが返せてない場合は、サラリーマンの月収の25%ほどが持ち出しになるというのが女性学研究の発見なんです。

日本社会では専業主婦というのは、文字通りの専業主婦が層として存在するようになったのは、やっぱり1975年ぐらいじゃないか。1920年ぐらいからどんどん中間層と呼ばれる社会層、サラリーマン家族といってもいいのですけれど、この層は厚くなります。しかし、いわゆる中流生活を維持するためには内職をしていたり、なかなか本当の専業主婦ではなかったわけです。1975年には、ようやく、家族扶養賃金をかせぐサラリーマンと専業主婦のいる近代家族が大量に生まれます。家族を入れる住戸も完成しました。1975年はそういう瞬間だった。ところが、ローンの重圧もありまして、1984年には有業主婦率が専業主婦率を超えます。そこで政府は、逆に主婦の座を強化するというか、保護する政策として、例えば第3号被保険者制度で主婦の年金を確保するという手段をとる…。でもそれはまた廃止されるという、そういう事態になっているわけです。あるいは配偶者の特別控除を税制の上で作るとかいうことを始めていますが、これも続くかどうかわかりません。

以後は、どんどん何が起こるかということ、家族賃金制度は揺らぎつつある。で、若者のフリーター志向についての批判は多々ありますが、実際は家族賃金のポストはどんどん減ってるわけで、若者が別に好き好んでフリーターをしてるというだけではないわけであって、むしろ個人賃金の方に制度が移りつつある。そうすると、個人収入と個人収入を大人2人分合わせた世帯というのは、やっぱり夫だけが稼ぎ手であった家族形態とはかなり違うわけであって、

移動性も高まります。遠距離家族とか、当然家族の多様な形態が現れます。他方、晩婚傾向はどんどん高まっているわけです。こういった要素が重なって、少子高齢化も進行する。

篠原さんがおっしゃるように、標準家族はもう標準的ではないという社会が始まっています。特に、大型公団住宅やニュータウンは、もともとは家族の容器の集合として設計されていたわけですけども、今現実には比率でいけば、標準家族の比率は、かなりのところ減っている。そういう時代にあって、孤立するのではなく、しかも国家に完全に依存するでもない、それぞれがそれぞれであり続けながら助け合うにはどうしたらいいか。篠原聡子さんの出してらっしゃる設問はそういう設問じゃないかなと思います。

私たちの去年のシンポジウムは、戦後の住宅理論は「閉じる」「間仕切る」がキーワードだった、それが転換して「開く」になった。「開く」の次に必要なのは「つなぐ」。じゃあその次はなんだろう、と私は考え続けています。それが、これからの討議の中で出てくるのではないかな。一つは「つなぎ続ける」という、その「続ける」のは一生の間、いつ誰とどのように組んで生きているかをネゴシエーションし続けなくてはならないという時代なんだということでもあります。それから分別ゴミではないけれども、階層やジェンダーで分断される私達が、そうではなくていかにまぜこぜで居心地良く住んでいくかという、そういう問題が今私達の研究の課題なのではないかと思います。この答えをさがす作業をこれからの討議の中でよろしくお願いします。

三林：これからみなさんとディスカッションしていく中で、「つなぐ」の次のキーワードを探していけたらいいなという風に思っています。西川さんどうもありがとうございました。では、コメントについて、篠原さんのご講演について、質問でもご意見でもどうぞお寄せください。

かなりスライドを多く用意していただいたの

ですが、時間をかなり端折らせてしまったので、もう少し丁寧に見たいというのがあればお声をあげてくださればと思います。

来場者：岩本と申します。先ほどフィリピンの例で、スキップフロアの集合住宅だったと思うんですけども、最後の方でマリアさんの像で、「The Family That Prays Together, Stays Together」という、何か韻をふんだ、非常に心地良い表示があったんですけども（既出資料19）、あれっていうのは、あの集合住宅の「祈り」みたいな、コンセプトを表しているのではないかなと思うんですけども、これも個をつなぐコンセプトじゃないかなと思うんですが。そのへん具体的にお聞きになりましたか。

篠原：どうなんでしょうか、森さん。あの彼女はフィリピンの専門家でして、文化人類学のフィールドがフィリピンだったので紹介してもらって行ったんですが、私達が、実はジャイカの人と、それから現地の方と行って、スラムクリアランスで作ってもらって、多分、15年、20年ぐらいたってると思うんですけど、そこに連れて行っていただいたんですね。あのマリア様は、いろんな所に、ほとんどの所にいらっしゃるんですね。で、あの標語はどうなんでしょうか、どこにでもあるんでしょうか、あの建物のコンセプトなんですか。

森正美：京都文教大学の森です。今篠原さんがおっしゃったように、フィリピンの人類学的研究をしています。まずマリア様について解説するとすれば、フィリピンは長い間スペインの植民地でしたので、街の中心にああいうプラザとよばれる公園形式のものがあ、そこにマリア像がカトリックの象徴として置かれるというのは広く見られる都市の形態であろうという風に思います。それが、住宅地が形成される、あるいは集合住宅が建てられる時に中心部に作られるというのも、かなり見られます。そしてそこにバスケットボールコートがあるというのは、スペインの後のアメリカ植民地期の遺産が、そ

こにミックスされているということになります。ですから実はあの空間の中には、かなり歴史的な刻印が深くなされているということになります。

そして御質問の「The Family That Prays Together, Stays Together」（家族は共に祈り、共に在る）という語句については、フィリピンの家族や親族＝ファミリーを重視する価値観とつながっていると思われます。そこに祈るというキリスト教の価値観が加わると、家族の重視という宗教的な意味も増します。ただ、スラムのような、共に頑張っていけないと、やっていけないというような状況の中で「Stays Together」、みんなで助け合おうという時に家族が核になっているということを考えると、それを今すばやく読みとられた方はすごいと思います。ただしフィリピンでは、逆に家族と一緒に住まなくちゃいけないけれども、例えば海外に出稼ぎに行ったりして、一緒に住めないというような、そういう意味での皮肉な現状も一方であるわけで、そういう風に読み込んでいくと、いろんな見方ができるのかなと思います。この標語が広く使われている標語かどうかということに関しては、申し訳ないですけども、ちょっと私では分かりません。というところで、よろしいでしょうか。

三林：よろしいでしょうか。じゃあ他にどなたかいかがでしょうか。

来場者2：すいません、山本と言います。お話を聞いていてですね、この「部屋の作り方」っていうのは、間取りとか、部屋の仕切りっていうのを中心に話をしてはったんじゃないかなって思うんです。けど、実際住まれたら、いろんな家具とかを置いていきはると思うんです。例えばパソコンでしたら、今は無線LANとかありますけど、ちょっと前でしたら、電話線の近くまでパソコンを持っていけないとインターネットができないとか、あるいはガスの暖房器具を使おうと思ったら、ガス栓の近くになんといけなとか。そうすることで冬は寒いんで、みんな

がそこに集まってくるとか、そういう風に空間が限られてしまうようになってしまうんですね。そのような影響があると思うんですが、あまり建築の分野においては、そういうことが重要視されてないように思うんですけれども、そのあたりのお考えとかお聞かせいただけたらと思います。

篠原：そうですね。可動間仕切をやったりとか、それからできるだけ仮説を内包するっていうか、いろんな風に住んで欲しいと思うんですね、そのへんのシミュレーションは、ものすごくたくさんやります。いろんな可能性を残せるようにしたいっていうのがあるわけです。例えば今こうやって出てるのは、26平米ぐらいしかなくて、真ん中に外部をぼーんと通しているの、それだけで結構住まい方を拘束してしまうんですね。これくらい小さいとですね、あんまりたくさんさんの展開はないんですが、一応いろんな住まれ方を想定して、ここに物が置かれるだろうということを想定して、その中で一番ワンルームとして気持ちいいのは何かというシミュレーションをしています。例えばワンルームの場合には、ダイニングテーブルとか、高い家具を置く場合は、ほんとに少なくて床座のことが多いんですが、床座の空間であったとしてもそういう物が置けるようにするっていうのと、ここで何かちょっと本箱でも立てて、分離ができるようにしようとか、そうすると自ずとこのへんに二カ所ぐらいテレビとかコンセントとか…。だから、お答えになってるか分からないんですけど、かなりいろんなシミュレーションをして、家具のレイアウト、あるいは住まい方の展開ができるような所には置いてはいるつもりなんです。一つネックになっているのは、うちの建築はほとんどが周りをガラスで囲むので、圧倒的に壁が少ないということで、結構置かれるところが限られるので、場所によってはフロアコンセントのような物を使っています。おっしゃるように、最近は、インターネットなんかは無線LANとかありますけど、戦後以来、日本のリビングルームのレイアウトを決めてき

たのはテレビなので、テレビの配置というのは昔で言えば床の間的な扱い。テレビをどこに置くかというのは非常に重要で、それはかなり気を使って考えてきました。ただ、今全部がセットになっているマルチメディアプレートというのがありまして、それをつけるとコンセントからLANから、テレビから電話から、全部セットになっているものがついているので、そういう意味では少し楽にはなったと思いますが。一応、私達は家具レイアウトのシミュレーションはかなりやっています。

三林：よろしいですか、はい。それではご所属とお名前を。

来場者3：所属は、京都文教大学を卒業して、今はフリーターをやっているんですが、間藤と言います。質問なんですが、篠原先生は、作る側としての建築のコンセプトとして、「つなぎあわせる」「まぜこむ」、人と人との関わりを繋げていくというコンセプトで設計されているということをおっしゃったんですが、一方で、住む側、この建築に住みたいという側の方達はどういった理由でその建築に住まれるのかということが1点目なんですが。次の質問として、1990年代の、篠原先生が作られた建築、そして2000年代に先生が作られた建築の中で、新素材とか技術の文脈から見て、何か変わってきたことがあるのでしょうか。それはその変化で、建築が、建築の価格が安くなっていったとかそういうものがあるのであれば教えていただきたいんですが。

篠原：一番最初の質問についてまずお答えしたいと思います。私達はアンケートの中で、入居決定の理由というのも一応聞いています。今回の場合ですね、まだちゃんとこれを整理していないのですが、比較的間取りの可変性に対する評価は高かったです。さっきのこの建物の場合には、こういう所の間仕切りというのは自分では変えられないんですね。一応遮音性能の高い間仕切りを使っているの、頼んでセットして

もらって、あなたは何LDKで、何寝室で使いますかっていう質問をして、で、2寝室で使ったりとか、ワンルームで使ったり、2LDKで使ったりっていう選択ができる。75平米だとやっぱりどうしてもこう、一般的には3寝室の3LDKっていうタイプが多いのですが、実際のニーズとしてはもうちょっと広くLDK使いたいよねとかっていうことに対応していたということで。間取りの可変性は住居決定の要因にかなりなっていました。で、共用設備では、「つなぐ」っていうところがどういう風に評価されたかと言うとですね、これはそんなに入居当時のポイントは高くありませんでした、残念ながら。ただし、入った人の中で、実際どんなアクティビティーが存在するかというと、その通り際で、縦づけに作ったバルコニーで、このへん、ここがちょっと共有っぽくなってるんですが、このへんで立ち話をするとか、それから生協の受け渡しが始まったりとか、住まれる方が最初これをどう評価したかっていうのは分からないんですが、実際にアクティビティーとしては、そういうような行為が見られているということがあります。ただし、私の物ではないんですけど、中庭型でもう少し小さい住宅で、この中に出てくるんですが、20戸くらいの中庭を囲む集合住宅で、デザイナーズマンションの中では特に人気が高くて、いつもウェイティングリストがいっぱいっていう人気の集合住宅があるんです。スクエアっていうんですが、その建物は、みなさん中庭が良くて入ってくる。その中庭に、なんかつながり感が、お隣の人と仲良くなれる気がすると言って、そういうポイントが高いという。ただ、この中庭でそういうイメージを持つには少し大きいという風に思います。だからこちらの仕掛けを理解されて、そういうようなニーズを最初から持って入ってこられる方もあるということです。

それから技術の面で言えばですね、安くなったかということですか。

来場者3：技術とか新素材の変化によって、昔は非常に高かったけれども、その変化によって安

くなっていったかっていうのが1990年代と2000年であるのかなのかということをお聞きしたいのですが。

篠原：例えば同潤会の頃の鉄筋コンクリートのアパートっていうのは、やっぱり高級品であったわけですね。戦後コンクリートの住宅っていうのは、もう高級品では別になくなったという意味では、あなたのおっしゃったようなことは起きてるんですが、残念ながら私の1990何年かの仕事と2000年の仕事の中で坪単価が落ちているのはバブルがはじけたからです。で、これといって、廉価にするシステムっていうのが技術のすごい普及によって、住宅の性能に影響を及ぼすようなものが、この期間の間に、一般化したかどうかというのは、かなりそれはあまり目立ってないと言った方がいいかなと思いますね。公団なんかはそういう試みをして、プレキャストコンクリートで、プレファブリケーションで作るとかいう試みをしてましたが、なかなかそれがこう、建築全体のコストを下げ、というところまではいってないということでしょうか。

鈴木毅：大阪大学の鈴木です。フィリピンで見られるような「つながる」関係性が生まれる背景には、いろんな要因があると思うんですね。もちろん空間形式も重要だと思いますし、台湾や中国をみるとやはり社会・文化的要因も大きい気がします。また日本の場合、キーパーソン的な人の存在も大きいですね。それから、不動産の仕組みとか制度がバリアになっていることも多いようにも感じます。私は建築出身なので、篠原さんのデザインされたあの縦の通路とかすごくいいと思うし、実際いろいろなことが生まれているわけですが、最近あちこちで興味深いケースをみていると、空間だけじゃなくて、キーパーソンがいないと魅力的な場や関係は生まれないのではないかと感じる場合があります。つながる関係のために何が一番重要なポイントになるのかについて質問したいと思います。

それともうひとつ、西川先生が言われる、国家依存でなく、「まぜこぜ」とか「つなぐ」という方向に、私はすごく同感するんですけども、最近——9.11 テロ以降ですね——、つながっていくというのは明らかに違う方向、別の流れというかむしろ逆の状況が目立つような気がしています。篠原さんもさっき言われたとおり、マンションの設計でも防犯的な話がかなり厳しくなっているようですし、五十嵐太郎さんの『過防備都市』（中公新書ラクレ）でも、防犯カメラの普及など社会が閉じて防衛的になっている事例がたくさん紹介されています。こういった個人個人が閉じようとしている状況についてのお考えも伺えたらと思います。

篠原：キーパーソンがですね、うまくいってるところはおっしゃる通り、必ずいるんですよ。さっき言ってたスクエアっていう人気のある集合住宅も、それを開発したTPOの高木さんっていうのはその筋では有名な人なんですけど、ご家族で住んでおられたんですね。家族用住居は2戸しかなくて、あとはワンルームだったんですけど。それとか、スペラルの場合は比較的横のネットワークがあるので、ちょうど私ぐらいの年齢の人が、比較的小さい子が小さくて、会社を辞められて子育てに専念してて、関西の方なので、東京に住むってことに何かあるモチベーションを持っておられて、よしここで頑張るぞみたいな方がおられます。で、子どものネットワークを通じて、磐石のネットワークをマンションの中に築いたんですね。ここは電気の暖房だけじゃ寒いということで、ガスのコンセントがなかったんですが、台所のガスを改造してガス栓を作ったんですね、それもその改造が賃貸でオーケーかどうかで微妙なんですけど、それをやって、おまけにみんなで買うと安くなるとか言って、5件まとめてガス暖房機を買ったという話があって（笑い）、その話を聞いてちょっとびっくりしたんですが。ただその彼女が言ってくれたのは、こういう風に会って話をできるような場所があるので、そういう意味では良かったっていうようなことは評価して

くださいましたが、実際そういうキーパーソンがいないとかなり難しいなという気はしています。そのへんは例えば管理会社として、やっぱり防犯の意味からも、そういうネイバーフッドっていうのはあった方がいいという見地に立てば、少しそういうものを仕掛けるようなことをするのか。まあ私は具体的にどういう風にしたらいいか分からないんですが、賃貸のコラボティブみたいな、最初から賃貸だけど、居住者を会わせておくとか、住む前からの仕掛けみたいなものとか、そういう仕掛けをする人と、設計者がもう少しそのあたり、住まれた後どうなるんだろうねっていうイメージを持ちながら、管理も含めてデザインだよっていうスタンスになっていくといいかなっていう気はします。

西川：そのキーパーソンについて、京都文教大学の鶴飼先生いらっしゃいますので、キーパーソンっていうのも時代によっても、その空間によっても違うと思うんですけど、一言コメントをお願いできないでしょうか。

鶴飼正樹：鶴飼です。キーパーソンについてのコメントをということですが、別のコメントでもいいでしょうか。西川先生がコメントでおっしゃった、「閉じる」「分断する」から「開く」「つながる」へというお話を聞いて、考えたことです。「閉じる」と「開く」、あるいは、「分断する」と「つながる」というのは、対立的に捉えられるように見えます。けれども、「閉じている」から「開ける」のであるし、「分断されている」から「つながれる」わけですね。篠原さんのお話でも、たとえば作られた建物は、基本的にはやっぱり、入り口がドアで閉じられていますよね。けれども、そういうものだからこそ、つながっていきけるのではないのでしょうか。そういう思いを強く持ちました。キーパーソンのことではなくて申し訳ありませんが、こういうコメントで代わらせていただけますでしょうか。

篠原：当然、その路地空間が、路地空間に向かってみんなが開いているのは、路地空間自体に閉鎖性がやっぱりあるからで、それは建築計画の中でも言われてることで、やっぱりその案配なんだろうと思いますね。「閉じる」ことと「開く」ことと「分断する」ことと「接続する」ことってというのは案配で…。ただ、スタンスとしてオプティミスティックにつながることを考えているかどうかっていうのは大きいかなという風には思いますけど。デザイン監修とか分譲の仕事をした人が、見に来てくださって、すごいおもしろいけど、やっぱりこの縦長のバルコニーは、プライバシー、私は距離をとるために作ったんだけど、やっぱりプライバシーの浸食になるし、間口っていうのがさっきも性能だって言いましたけど、やっぱり間口をそういう装置として使うっていうのは分譲で使うのはまだまだあり得ないって言われましたが。スタンスの違いによって、同じ「つなぐ」「閉じる」でも結構できるものは違ってくるのかなと思いますけど、当然両にらみなんだろうという気はします。

石川真作：京都文教大学の石川です。キーパーソンというお話がでてまして、そこでお話うかがってて思ったことがあったんですけども、キーパーソンの例を出された方の場合、お子さん同士のつながりからネットワークを築いたということをおっしゃってましたが、私の個人的な実感でもあるんですけども、こういう集合住宅でつながりができる場合っていうのは子どもの関係でつながっていく機会が非常に多いと思うんですね。つまり現実には、本当のキーパーソンというのは子どもだったりするんじゃないかと感じたりもしてまして。今日いただいた資料でも、子育てネットワークという形で分析されている部分だと思うんですけども、ではそうじゃない場合の、純粋なワンルームで、単身者ばかりの場合で空間を作った場合に、どういう風に道はつながっていくのかということの一つ伺いたいと思ひまして。

篠原：松陰コモンズは、全部シングルなんですね。すごい難しい質問なんですけど、うまくいっている例をあげるとすると、目的がはっきりして集まった人たちっていうのは当然うまくいくっていうか、あるつながりをもつ。松陰コモンズの場合は、古い民家をシェアして安く楽しく住もうっていうのをすごいシェアしています。例えば風の村は老いっていうか、体の衰えっていうか、そういうものを共有して、じゃあそれを抱えながらどうやって安全に快適に暮らしていこうかっていうことを共有しているので、そうでない、全くシングルの人たちが、バンッと集まって、どうやってコミュニケーションをとるのかっていうのは、私も教えて欲しいです（笑い）。目的がはっきりしてる集団はすごくうまくいってますね。だから一人の人がこれじゃ困るって思えばなんとかなるかなって思いますけど。

西川：若い人がシングルで住んでるだけじゃなくって、例えば京都の古い長屋の路地、その行き止まりになるような路地、京都市内にいっぱいあるわけですけど、そこの路地の住人は現在、多くが高齢者夫婦か高齢者シングルになっております。つまり、ずっと住み続けて30年、40年たつと、「家庭」家族は夫婦一代限りのものですから、必ず誰かが一番最後一人となる、と決まっています。私も実はそういう路地に住んでいます。かつて路地で遊んでいた子どもたちも今はいません。そこでのつながる要素は、なんて言うかな、マイナス問題が起こった時、トラブルがあった時、逆につながりができることがあります。ですから、これまではトラブルはできるだけ避けるっていうのが、なんて言うかな、いいことだ、みたいに私も思っていました。急に、例えば何か高い建物が建って紛争が起こり、住むことができなくなるとか、あるいは今年は集中豪雨が多かったんですけども、実は私が住んでたところも床下浸水しちゃったんですけど、そういう災害がおきるとか、これはもう避けたいトラブルですね。そしたら水が激しく流れてる間は、お隣と行き来ができないん

ですね。路地が川になってるわけですから。そしたらやっぱり心配になって、お隣はお一人暮らしだから。うちはようやく二人なんですけれども。やっぱり電話をかけるという風なことはいたします。すると、次の朝にごあいさつが返ってくる。で、このごろ私はトラブルっていうのは、決して悲観的な要素ではないんじゃないかという風なことを思い始めています。トラブルを一つずつ、一緒になんとか互いに、あるいは外部に対してネゴシエーションというか、交渉、折衝して解決していくっていうことから、かすかなつながりが生まれる。理想的な共同体をはじめから作るっていうのは、私はあんまり信用できません。せっぱ詰まってトラブルが起こって、もうお互い生きていけないので何とか解決しようってところから始まるつながりの方が信用できそう。で、そういう体験を何回か共有するっていうことが、一緒に住んでるとどうしてもあるんですね。そういうことも、大事なんじゃないかな、トラブルもプラスにとらえたい、という気がしておりますが。他にみなさんいかがでしょう。

佐藤知久：京都文教大学の佐藤知久です。今日は集合住宅について、その中で個々の住人同士がどうつながるのか、その点について建築的文法がどれほど発展してきたかを、豊富な事例を通じて非常に面白く見せていただきました。

ただ、僕自身も集合住宅に関心があるので思うのですが、すごく良くできている集合住宅というのは、そこに住んでいる人たちにとってはとても良いものなんだけれど、周りから見ると、あこがれとその裏返しとしての敵意の対象というようなところがあると思うんです（笑い）。中庭タイプがすごくいいと僕も思うんですが、その中庭が良ければ良いほど、そこに入ることができる人とできない人の差というものができてしまう。そのことを僕はずっと感じていて、どうしたらいいのかと思っているんですね。先程西川さんが言われた「つなぐ」の後のキーワードについても、内部の住人たちをつなげる住まいが、別の似たような住まいとどう

つながるのかということが、とても大きな課題としてあると思うんです。

それは言ってしまうと、都市空間そのものを、どのようにして「つなぐ」空間にしていけるか、ということになると思います。この課題についてはもちろん、個人の建築家として仕事をしていくなかで対処するというのは難しい。やはり建物自体の価値をあげなければデベロッパーも住人も満足しないし、住宅を外に開きすぎると、住人にとってのリスクが増える可能性がありますから。この問題を象徴するのが、住人にとってのみ快適なゲイテッド・コミュニティですね。

しかし、やはり「個をつなぐ住まい」同士がどうつながっていくか、都市空間自体がどのように人をつなげる場になりうるかという問題は、個々の建築の外の話になってしまうんですけれども、あると思うんです。この点について、建築家として篠原さんがどのような考えを持っておられるかということをお聞きしたいと思います。

篠原：先程も言いましたように、コミュニティの人と人がつながることの一つの、あるいは究極的な目的は、何かある種のリスクヘッジなんだろうと思うんですね。そう考えると、コミュニティがそういう集住体って言いますか、集住体がクローズであるってことは、やっぱりそれもリスクを大きくすることなんですね。その集合住宅そのものが、地域に接続していくことっていうのは、とても重要だと思っています。この計画の場合には、そういう意味ではいくつか仕掛けたことがあって、一つは、これは一貫してそうなんです、過分なお言葉をですね、西川さんからいただいたんですが、一つはファサード（正面の外観）なんですね。ファサードっていうのは、建築が社会に対してどういう風に接するかという中心の言語だと自分は思っていて。で、ファサードが、これは外付けのロールスクリーンがこうしまったりとか、こうやって全部しまったりすることはあんまりなくて、こうばらばらにあいたり。だから生活の

シーンみたいなものがわりと気持ち良く外と接続する。それは昔の日本の家屋が簾であるとか格子であるとか、そういう手法で、分断もしないし、あけっぴろげでもないようなコントロールがしたい。それは、単に建物が立派に綺麗に見えるというだけではなくて、そこに生活している人の感じをうまく都市と接続させたいということが一つ。これは、ずっと私が一貫して思っていることです。で、それともう一つここでやったことは、思っていることが共通していたのでびっくりしたのですが、中庭型っていうのは非常に優れた集住の形式だと思っていますが、やっぱり中庭のクローズな感じっていうのが、どうも鬱陶しいなって思うこともあって。これはですね、こうやって今こっち側に視線が一応ぬけているので、中庭の居住性も担保されると同時に、歩いて行く人の視線が一応中まで通るようになっていく。だから中庭の景色を、ある距離をとりながらですけど、街路とこうつなげるということと、三点目は、エントランスホールまでは人が入るようにしました。ここでオートロックをかけているので。で、エントランスホールをどうするかっていうのもやっぱり考え方の違いで、ちっちゃいことなんですけど、オートロックをかけるっていうのは最近では絶対なので、それをしないっていうことは仕事をしないことに等しいぐらい大変なことなんですけど、まあオートロックはかけましょうと。で、監視カメラもつけましょうと。だけどここでやってください、と。エントランスホールまでは誰でも入れるようにして、例えば、グッドデザイン賞をいただいた時に、ここに展示をしましょうとかいう話もあったりとかして。エントランスホールぐらい、こういうのを本の中では、オープンコモンみたいな、正確な英語かどうか分かりませんが、そういう言い方をしていて、自分たちが集まるため、自分たちの結束を固めるための中間領域っていうか、コモンっていうのと、やっぱり自分たちの集団が地域とつながるためのコモンっていうのは多分別のもので、そういうのも何か仕掛けていきたいねっていう風に思って、それはこれぐらいの規模にな

らないとなかなかこう、プランとして展開できるようなことにはならないんですが。そういうことを考えています。

三林：ありがとうございます。すいません、だいぶ時間を過ぎてまいりました。私の頭の中でも、「つなぐ」から次のキーワードが何かというので、ぐるぐると「守る」とか「変わる・変わらない」とかいろんな言葉がめぐっています。この後もしお時間許せる方おられましたら、また二次会の方でゆっくりお話し合いできればいいかなという風に考えております。本日はどうもありがとうございました。最後になりましたが、講演者の篠原さんに大きな拍手を送りください。ありがとうございました。

(了)